

翻刻『別本 御書物方年譜覚書』（其の二）

川崎 芳村
佐知子 弘道
大 本

〔凡例〕

本稿は、さきに公表した川崎佐知子・芳村弘道・中本大「翻刻『別本 御書物方年譜覚書』（其の一）」（『立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第十四号 二〇二一年三月）の続編である。立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所蔵『別本 御書物方年譜覚書』の天保十三年から嘉永六年までを翻刻した。翻刻の方針は、前稿の凡例をさりたい。なお、記事には、国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/> に公開される『御書物方日記』（請求番号〈257-0002〉）の冊次およびコマ数を《》内に記した。天保十三年七月より十二月まで、同十四年正月より六月まで、弘化元年より同三年まで、嘉永元年より同二年まで、同四年正月より六月まで、同五年七月より十二月まで、同六年七月より十二月までについては、『御書物方日記』の簿冊を欠くため、冊次およびコマ数を付さなかった。前稿と同様、翻刻は、芳村・中本・川崎が厳正なる討議を経て、成

立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要 第十五號

稿した。本稿の責任は三者が負うものとする。

翻刻原稿の点検において、福井工業高等専門学校一般科目教室助教である池田彩音氏より協力を得た。記して深謝する。

〔翻刻〕

同十三寅年

小林半右衛門御役筋手透之節者、地誌調所江、折々

見廻り候様、御書付但馬守殿御下ケ、（通事風書） 二ノ十三《199・65》

右御礼、但馬守殿江罷出、尤平服之事、 二ノ十四《199・67》

来卯年四月、日光

御参詣之節御用掛等小本出板之儀、出雲寺金吾「三三七丁表

願出候ニ付、右願書雛形相添伺書進達、 三ノ廿二《199・121》

但、寛政以来、御大札之節者、書物屋行事を以、其筋江

申立、願濟之上、売捌候処、此節者、行事無之ニ付、

七九

御書物御用達之廉を以、一年限ニ而、相願候義ニ有之、
如何可申渡哉云々、

中山栄太郎(利起)

来年日光山

御宮 御参詣之節、御供被仰付候旨、於御右筆部屋、

縁類越前守殿被仰渡、

三ノ廿六《199・134》

日光御用掛出板同上倉彦左衛門談ニ寄小札付替、(本持正邦)
〔三七丁裏〕

撰津守殿江進達、

三ノ廿六《199・134》

右、願之通可申渡旨、被仰渡、

四ノ九《199・155》

曆問屋株式之唱停止ニ付、出雲寺御用之曆買納来

候処、向後、直段引下、御用ニ差上且壳捌、曆開板

いたし度旨、願出、

四ノ六《199・149》

右願書相添、撰津守殿江進達、

四ノ十一正《199・157》

岩崎多左衛門

津田藤太郎

来卯年、日光

御参詣之節右両人之者召連候儀伺濟、四ノ十四《199・171》〔三八丁表〕

黒鍬之者笹間鎌三郎、御書物同心明跡江、申渡旨、

御書付、但馬守殿御渡、

四ノ廿一《199・181》

御目見以上、以下ハ勿論、羽織格之者ニ而も、御譜代者

之厄介子共之内、御抱者之方江養子差遣候儀者

有之間數旨、御書付出る、

五ノ二《199・201》

ヤシヤブシ、御書籍表紙染移ニ用、《199・205》

タクボク糸、帙コハセとめに用、《199・207》

日光

御参詣之節、御目見以上御供之内、七拾歳以上駕籠

御免ニ付、御行列之内江駕籠ニ而、相立歩行御供〔三八丁裏〕

続兼候分ハ、年若之者与繰替可申旨、

御目見以下、七拾歳以上之者ハ、年若之者与繰替、

御目見以上、七拾歳以上ニ而も、其身達者ニ候ハ、騎

馬ニ而も宜候旨、御書付出る、

五ノ廿九《199・250》

御参詣御用掛御役人附忝枚摺三枚続、両様とも売

歩行候、忝枚摺之方ハ、出雲寺願濟、御役人附以板下□□

いたし候様ニ、相見候由、金吾より届出、《199・265》

右之趣、御届書、撰津守殿江、進達、

六ノ七《199・266》

右書面、町奉行江御下ケ被成候処、届不差出壳歩

行候段不畏之旨申聞候旨町奉行申聞候由ニ而書面〔三九丁表〕

御下ケニ相成、

六ノ十九《199・292》

武鑑直下ケ之儀、伺之通、可被申渡候事、

《199・267》

大成武鑑 代拾両、是迄拾式両

万世武鑑 百貳拾四文、同百四拾八文

有司武鑑 同、同《199・163》

出雲寺金吾曆開板願之儀ハ、難被及御沙汰筋候事、

筒井恒次郎屋敷拜領願進達、

六ノ七《199・267》

当番御目付中より書面到来、

六ノ八《199・269》

別紙拝領屋敷願書兩様ニ被書出候処、右ハ何レ(三九丁裏)

方ニ而も取極、絵図面添、被致進達候様、主膳正殿被(大岡忠相)

仰渡候間、則、進達書面、致返却候、
六〇〇〇〇〇〇(月八日)《199・270》

大柳甚之助

市野市郎左衛門

長岡栄之助

右之者、日光江、為御持ニ相成候間八州之御絵図并郷村

帳上包上袋等為冥加御入用不相掛仕立候、
六ノ十七《199・285》

小普請組
中坊金藏支配(舊題)

吉田四郎三郎

時憲曆箋积 貳冊(四〇丁表)

右御書物之義ハ、拝借無御座候趣、四郎三郎申聞候ニ付(御書)

物奉行江掛合申候処、寛政七卯年二月廿八日、御用出ニ相成

候段、御書物蔵書留有之候旨申越候ニ付、右之趣、四郎三郎江、

申達、為取調候処、明和六丑年五月、前条御書物拝借返上

相済申候趣書留も有之、且、寛政度旧記類取調候処(舊之)

御役宅類焼も有之候儀故、書留類之内、焼失仕、寛政七

卯年之書留物無御座候、然る処、寛政十二申年、父勇太郎、

天文方被 仰付候節、御書籍御道具類引統拝借仕度段、

申上候書留之内、右御書物之儀、無御座候、一鉢御書籍御道

具類拝借之儀ハ、跡御役被仰付候都度々、拝借御預り御品(四〇丁裏)

目録ニ相認申上候上、尚又、引統拝借仕度旨、其者限り、

改拝借仕候義ニ御座候故、前文申上候通、寛政七卯年ハ

祖父靱負勤役中之事故、同人拝借仕候儀ニ御座候哉、

返上仕候儀ニ御座候哉、此義相知レ不申候得共、勇太郎

跡御役被 仰付候節、書目ニ時憲曆箋积と申御書物無御

座候趣ニ付、再応、為取調候得共、父勇太郎、并四郎三郎

勤役中、拝借不仕候旨、申聞候、依之、御届申上候、以上、

四月十二日

中坊金藏

《199・161》

右之通、撰津守殿進達可致積、仍差支之有無、為念

掛合候由、文通有之、(四一丁表)

右之趣、御届有之候とも、差支ハ無之、乍去、寛政七卯年

二月廿八日御用ニ相成、此節迄、御下ケ無之ニ付、四郎三郎引統

拝借之心得候段、及挨拶候、

濟生方、元版写本

拾老冊

濟生方、別本写

老冊

右、老部ハ、貴重之御本ニ候得共、奥御用ニ而、可差出候

例有之候ニ付、貳部とも、御殿江持參、成嶋(向題)図書頭江、

相渡候、

七ノ二

官庫御書籍、御若君方、御自分願ニ而、御拝借之

例、向山源(舊)太夫問合候ニ付、右近例無之、乍去元文之比(四一丁裏)

御側衆進退ニ而、若年寄本多伊豫守殿御拝借有之

候儀、旧記相見へ候段、及答候、

七ノ十五

平山堂図志 四冊

右者、大炊頭殿御用ニ而、(御親書)大和守殿御拝借之由、向山源太夫

を以、差出、

七ノ廿一

忠孝奇特者、出板願之儀、以来耆ケ年、一兩度ツ、二而、

其方共より、町奉行、御勘定奉行江問合候ハ、申渡写

差越候筈ニ付、其旨相心得、出板之節々、金吾より草

稿を以、町奉行江相伺候上、彫刻いたし、摺餘り之分、

其筋渡世之者江勝手次第手広ニ相渡候様、可被^(四二丁表)

申渡候事、

右御書取、但馬守殿御下ケ、金吾江申渡、

官板物、出雲寺金吾江可被仰渡段、林大学頭申聞、

日光御供之面々、下々ニ至迄、晴天雨天とも、一同菅

笠用ひ可申旨、被仰渡、

御参詣ニ付、勤番之面々ハ、仮養子願書可被出事、

当日御供之面々者、仮養子願書被出不及候事、

右、御馬医療治仕候ニ付、為薬種料被下之旨、御書付、

諏訪部鎌五郎江御下ケニ付、同人より写を以、申越^(四二丁裏)

御書付之趣、斧太郎江、申渡、御金ハ請取次第、鎌五郎

方より案内可有之、其節罷越、請取候筈、

御参詣之節、被下候人馬、但、人馬引替無之

御書物御長持耆棹 人足九人

御伝馬耆足 御書物奉行

同心貳人

高橋作左衛門没収本之内、官本混入候間、引分置、

追而、新取御書籍類御書目江、認入候節、繰込可申旨、伺

之通被仰渡、

御参詣被 仰出候ニ付、御蔵米、御供之面々支度入^(四三丁表)

用金安利年賦ニ而用立度旨、札差共願之通、被仰渡、

御参詣ニ付、勤番、并御供御用掛之面々、諸拝借、当

暮上納之分、御差延被下候、

同十四卯年^(八四四)

日光 御在山中并御道中ニ而、目安訴訟出候とも、

取上申間敷旨御書付、

十一日之御具足御祝、御朦中ニ付相延候旨達、

泰姫君様 当月四日逝去、

日光江為御持ニ相成候御長持御修復ニ付、藤太郎差添^(四三丁裏)

御細工所江、差遣、

右に付、御長屋御門断、当番所江申達、

高橋作左衛門没収本、并天保十亥年当分御預被成候

蛮書ハ、新取御本之心得を以、御書目ニ繰入候義、伺濟、

日光江罷越候向々為小宿割、家来早々出立為致、面々

宿主江可懸合旨達、

中山栄太郎御供ニ付、白銀五拾枚頂戴、

多左衛門、藤太郎江者、白銀三枚ツ、

御具足御祝頂戴、

御書物蔵四ヶ所、并会所廻り草多く生候に付、刈取

十二ノ十一

十二ノ十五

十二ノ廿三

正ノ九

正ノ十四

正ノ十八

正ノ十九

正ノ廿四

正ノ廿五

掃除之儀、小普請方江達、

正ノ廿八

津田藤太郎、学問所下番被仰付、

二ノ十四

右代り、日光御長持差添、市野市郎左衛門被仰付、

銀三枚被下之、

二ノ十九

甲府江学館御取建、右江廻り候御書籍も有之、御文庫内

重複本取調候様、大学頭談ニ付、取調一覽為致候処、

書経伝説彙纂

詩経伝説彙纂

全唐文」(四四丁裏)

右三種ハ、昌平江相廻し、其外拾五種ハ林家江引

渡之上、甲府相廻候様、被仰渡、

日光御用御紋付御挑灯貳張、蠟燭三拾挺請取、

是迄、御風入中請取候品々、左之通伺濟、

一、樟腦 百八拾斤

一、片腦 五拾斤

一、上西之内紙 百枚 以来相止

一、岩城紙 壹束六帖 々

一、布巾 貳丈 々

一、生漉半切 貳千枚 以来千貳百枚四年ハ千三百枚」(四五丁表)

一、筆 貳対物 拾五対、三対物 貳拾五対

一、備後薄縁 拾三枚

一、手桶 割蓋附 貳

一、柄杓 貳本

一、厚程村紙 五帖 以来帖帖

一、上蔵半紙 六束 以来拾六束 増

一、中蔵半紙 四拾壹束 以来貳拾束

一、墨中形 六挺

一、棕欄帚 貳本

一、真書筆 壹対物 拾対、新親請取、」(四五丁裏)

一、中美濃紙 貳束 々

一、上糊入紙半切 貳百枚 々

一、朱墨 小形 貳挺 々

黒鐵部屋之次江貳疊敷供部屋建添願、不被為御沙汰、 三ノ廿九

山本清右衛門、笹間鎌三郎、都甲斧太郎、御取締懸、被仰渡、

御書物師唐本屋清三郎御用取放候様、被仰渡、 四ノ五

出雲寺より毎月御小納戸向江差出候武鑑御役替、其外都而、

不行届ニ付、以来念入候様、奥向より申出候由、御細工頭より

達到来、 四ノ六」(四六丁表)

一、今度留守中、平日之事、真田信濃守含之間可相計、是、

若異変出来之時ハ、

右大将可有下知之条、可存其旨事、

一、於城外、何篇之義、雖有之、城中番之輩可所出

可相待差図事、

一、喧嘩口論猶更可慎之、若無抛儀ハ、後日之可為沙汰事、

附、於城中、万一、喧嘩口論有之時、其近所之輩、

可鎮之、猥ニ不可出合事、

一、城中并所々勤番之面々、兼而定置法度之趣、堅
相守るへく事、」(四六丁裏)

一、火之用心可入念、自然城中火事於出来者、殿中

番之輩、(或曰守)信濃守、本庄伊勢守、并番頭、可任差凶事、

右条々可相守此旨者也、

天保十四卯年四月六日

御黒印

「竹階子三挺出来、長三間四尺有之、短くして、御間ニ

合不申、小普請方江持歸らせ候、

七ノ三《200・7》

御蔵内ニ有来御細工所ニ而御修復、并、御引替相成候品々、

一、御紋附春慶塗通御長持 貳棹

但青漆貳重黄漆御紋附桐油三」(四七丁表)

一、箱鈎台 壹

同断桐油壹

一、同 御扶箱 壹

同断

一、同 御文匣 大小三

内、大貳者、煮黒メ缺、木綿打紐附、

小壹者、同断、真田紐附、

同断、桐油、大之方 壹

一、溜塗桐硯箱 皆具共 五面

一、上硯石 七」(四七丁裏)

一、秤 壹本

一、青漆貳重黄漆御紋附御筆筒桐油 三

一、曲尺 俱、壹番 壹本

一、極上撫刷毛 四挺

一、仮張骨 俱、張立有之 三枚

一、掟木 檜長貳尺厚四分巾二寸 壹本

一、粘板 柳梅両品ニ而横三尺竖壹尺貳寸、 貳枚

一、紙裁庖丁 貳番 壹挺

一、溝打錐 壹本

一、鍼針 壹本」(四八丁表)

一、粘漉 壹

一、粘入鉢 壹

一、青砥 大 壹

一、合七砥 壹

一、棕欄帚 年々引替 貳本

右書付、七月廿三日、御目付中川勘三郎江相渡、《200・44》

日本人外国江漂流いたし候もの、唐、阿蘭陀之内請

取可連越、其外之國々より連越候とも不請取旨、御書付

出る 八ノ九《200・71》

樟腦三拾五斤当年限増請取被仰渡 八ノ廿九《200・108》(四八丁裏)

御風入中、加出之者江、勤日数を以、御賄代銀壹両壹分ツ、

可被下旨、当三月被仰渡、此度節、御風入相濟候間、加出

日数取調、御賄代銀請取申度、尤、以来、年々御風入

日数取調差上可申、兼而、御勘定奉行江、御断置願書
進達、
八ノ卅《200・110》

鈴木左兵衛、願之通、世話役差免、右跡、市野市郎左衛門
申渡候、当三月より世話役之者江、御扶持方被下義ニ付、
九ノ廿《200・151》

入御聴置旨、書面上る、
姫君様方、御三卿方、御物見下案内次第、是迄下乘
下馬いたし候処、以来不及其義旨、越前守殿御口達〔四九丁表〕
九ノ廿六《200・159》

御法令外箱桐春慶塗御紋附出来候様、申上
候処、有形之ま、新規出来、書面之趣、難被及御沙汰、
十ノ三《200・213》

此もの儀、日光
出雲寺金吾

御参詣供奉御役人附出板之儀、馬喰町貳丁目忠兵衛
地借治兵衛より、奉行所江、願出候処、沙汰無之候ニ付、此
ものより其筋江相願聞濟相成候ハ、売捌可遣旨申聞
候を、如何之儀とも不心付願濟之上、治兵衛方ニ而、為
売捌、殊ニ同人義、日光道下記出板之儀奉行所江〔四九丁裏〕
願出候而者手重ニ付、此者願濟之躰ニ仕成、売出し
候趣申聞候ハ、早速差留可申処、伯父之儀に候とて、
其儘ニいたし置候段、右始末旁不埒ニ付、押込申付候、
右、十月廿一日、鳥居甲斐守役所ニおいて申渡、
右之趣、御届上る、差扣伺可差出哉之旨、御仕置掛り江、

問合候処、不及差出旨、申聞、
十ノ廿二《200・244》

老対物之筆、大形墨之儀ハ、御右筆所之外、相用ひ
申間敷旨、明和八卯年被仰渡候処、其向ニ而、請取候、
伺濟承度旨、御勘定所より懸合江答左之通、
御書物蔵ニ而相用候老対物真書筆拾对之儀ハ〔五〇丁表〕
新規年々請取候積、当三月撰津守殿江伺濟、
右者御書目并御張目録等相認候ニ、貳対物之筆
ニ而者迎も御用立兼候故相願候旨、
十ノ廿七《200・252》

鈴木文蔵外老人、御切米、御扶持方御断状下書、加筆
のため、御勘定所江相達候処、昨年より仕方相立候間、
以来共断状者、此方より直ニ書替所江遣し、加筆
之上、右案紙添、本紙御勘定所江相達候様申聞、
下書返却有之、
十一ノ十八《200・295》

御文庫内御本箱御取繕、并御張目録清書皆出来、勤
向惣而改正ニ付当年ニ限御文庫内御目付見廻り有之〔五〇丁裏〕
候様申上候処、難被及御沙汰旨、被仰渡、
十二ノ廿一《200・317》

御文庫古写本之内、古筆見江鑑定為致筆者年代等
相糺度、享保度ハ、会所詰番不仕故、
御城おいて、古筆了音拝見仕候得共、此度ハ会所ニ
おいて拝見為仕旨、伺之通被仰渡、
再正ノ廿二《200・338》

享保度請取物
一、樟腦 九拾斤 一、片腦 拾三斤
一、上之程村紙 七束 一、中美濃紙 四束

一、上那須紙 拾五束 一、越前小奉書紙 壹束

一、中粘入紙 四束 一、布巾 貳端(五二丁表)

一、筆 貳拾五対 一、墨 拾貳挺

御贈所

一、棕欄帯 七本 一、手桶柄杓共 三ツ

御細工所

一、手袋木綿 拾六対 一、羽帚雁 貳拾本

一、薄縁 六拾枚 貳拾七枚ハ古備後表
四十枚ハ琉球表

享保二十年以来年々臨時請取

一、下粘入 壹束 一、中美ノ 壹束

一、下美ノ 貳束 一、厚程村 壹束

一、那須 貳束 一、広紙 貳束

一、筆貳対物 三拾対 一、墨貳面形 貳挺

寛政度請取高(五二丁裏)

一、樟腦 百貳拾斤 一、片腦 拾三斤

一、端不切 三束三帖六枚 一、中藏半紙 三拾四束

一、上厚程村 六帖 一、西内 百四拾四枚

一、運上中粘入 壹束五帖 一、生漉半切 千四百枚

一、中美ノ 壹帖 一、岩城 貳束壹帖拾貳枚

一、上岩城 六束九帖五枚 一、上藏半紙 拾壹束五帖

一、筆貳対物 四拾対 一、筆三対物 貳拾対

一、墨中形 八挺 一、布巾尺長 壹反半

一、棕欄帯 貳本 一、羽帚鴨 五本

一、手袋 三対(五二丁表)

一、手桶蓋とも、三ツ 引替 三本

一、薄縁 拾五枚切損之分引替

(八四四)
弘化元辰年

会所御入用品替左之通同済、

一、中美濃紙 貳束

一、生漉半切 百枚上糊入半切百枚之替

一、同 九百枚去卯四月同済より 三百枚減

一、厚程村 壹帖

一、中藏半紙 貳束上藏半紙貳束之替

一、同断 拾束何済より 拾束減(五二丁裏)

一、筆貳対物 拾五対同断 拾対減

一、真書筆壹対物 五対同断 五対減

一、墨中形 四挺同断 貳挺減

一、朱墨小形 壹挺同断 壹挺減

御文庫古写本筆者等見極兼候間、了伴宅下ケ之儀(古筆了伴)

相同候処、最早此上不及鑑定、宅下ケ之儀ハ猶更難被

及御沙汰旨、被仰渡、 三ノ廿五

夏足袋願差出候処、当年より御書取ニ而被仰渡候間、

承付いたし候様、御同朋頭申聞候、 三ノ十七

足袋用可被申候事、(五三丁表)

出雲寺金吾病氣ニ付、願之通、養子万次郎江家業相続

被仰付、 三ノ廿一

右ニ付、林大学頭江達、先例者無之候得共、官板摺立売捌

候に付、相達候、

同断申渡候旨御届、御用部屋を以上る、

同断大目付、御目付、屋敷改、御細工頭江達遣ス、

御本丸炎上ニ付、一統西丸江出、御文庫御別条無之段、

張番坊主を以、御目付江相届、

五ノ十

西丸江罷出、詰番之もの御老若方御登、城之節、出席

之儀御目付江問合候処、焼火之間ハ新御番相詰候に付(五三丁裏)

追而治定之儀、可相達旨、久須美六郎左衛門申聞候、五ノ十二

御小人目付会所江罷越、御目付遠山半右衛門口上之由にて、

御書物奉行、於御殿扣所何方候哉、面談等いたし度節ハ、

何方江相達候哉之旨申聞候ニ付、於、御殿、別段詰番ハ

無之、御登、城濟、御用無之候得者、直ニ会所江引取、相詰

罷在候段、及答候、

五ノ十四

金三拾両 小林半右衛門

金貳拾両 金井伊太夫(俊有)

御本丸炎上ニ付、上納仕度願書、御同朋頭を以上る、

五ノ廿(五四丁表)

差扣中御切米御扶持方請取之儀、御切米手形改江、問

合候処、持高之御切米、御扶持方ハ直判手形ニ而請取

差支無之、御役高、御役扶持之分ハ、御免後、御勘定

奉行添状候事之由、金田鞆負申聞候、

五ノ廿四

大学衍義、奥御用ニ付、可差出旨、依田源太左衛門申聞候、

先達而差上候老部ハ炎上いたし、其外御貽ハ、

御手沢本ニ而、御遠慮も可被為在哉、仍、大学衍義

老部、出雲寺より為相納候処、代銀三拾目ニ有之、御払

本代銀を以、差略可仕哉之段、主膳正殿御内意相伺

候処、其通可取計旨被仰渡、

五ノ廿六(五四丁裏)

老人勤中同役を以、可差出諸願諸届等、御賄頭、御細工

頭之内を以、可差出哉之段、御目付江問合候処、其通にて

可然、尤其次第口上濟可申旨、井戸大内蔵申聞、六ノ二

金井伊太夫娘縁御届、山本新十郎を以進達、六ノ十

服忌便覧 會計便覧 縣令集覽

昇栄武鑑

右之品々、是迄之通出板可致、

營本マ榮量記

右者、殿中秘事書載候ニ付、絶板可致旨、出雲寺江

申渡、六ノ四(五五丁裏)

御本丸御普請懸御役人附出板之儀、出雲寺万次郎

願出候ニ付相伺候処、難被及御沙汰、内々ニ而出板いたし候は、

敵刑之御沙汰可有之旨、六ノ十九

兵録 十六冊

右、越前守殿御拝借之旨、荒井甚之助申越差出、十二ノ四

星野鋳鋪御抱入、願之通可申渡旨、安芸守殿御書取を以、

被仰渡、是迄ハ御附札を以、被仰渡候ニ付、申渡候趣、御届

差出候得共、此度よりハ御書取ニ而承付返上ニ付、御届ニ及

ひ申間敷哉、仍其筋問合候処、申渡濟之廉を以、

御届差出可然旨申聞候ニ付、其通取計候、十二ノ八(五五丁裏)

星野鋳鋪御藏断状案御勘定所江相達候、

十二ノ九

六藏当夏御借米請取度段、親類共申立、

五ノ四

右断状案加筆いたし差越候、

十二ノ十五

右ニ付、願書、主膳正殿江上る、

五ノ十四

弘化二巳年

右、願之通、被仰渡、

五ノ廿一

燒失御書籍補写之もの九人江、為御手当、老ヶ月老人

正ノ朔

筒井恒次郎乱心自害いたし候段、親類共より世話役江申聞、

五ノ十八

金貳分ツ、且、御賄代銀被下之、

正ノ朔

今夕市郎左衛門罷越、様子相糺候様申渡、

五ノ十八

補写御用ニ付、金井伊太夫日々加出いたし候段申上候書面

二ノ廿二

右之趣、後刻御宅江罷出、可申上旨、主膳正殿江御直ニ

五ノ十九

主膳正殿江上る、

二ノ廿二

伊太夫申上、御目付江も申談置、

五ノ十九(五七丁表)

今日御本丸江御移徙ニ付、源太左衛門外三人とも

二ノ廿八

右、始末申上、書写等、昨夕、伊太夫、主膳正殿御宅江罷出、

五ノ廿

西丸江登 城、夫より御本丸江登城、

二ノ廿八

進達、

五ノ廿

今十六日四時、新衛門、伊太夫罷出居候様、昨夕都築(五六丁表)

二ノ廿八

其節、恒次郎跡、手前抱之儀、御内意伺も進達、

五ノ廿一

長三郎より申越、登 城いたし候処、於出逢之間、但馬守殿

二ノ廿八

右、跡手前抱之儀、定例之通可仕旨被仰渡、

五ノ廿一

御逢、渋川六藏儀、評定所江同道可罷越旨、御書付

二ノ廿八

恒次郎方江、世話役相越、死骸取片付、并、跡御抱入

五ノ廿二

御直渡、六藏江之御書付も御渡有之、同人詰番に付、

二ノ廿八

之儀、申渡、

五ノ廿二

同道帰宅之上、同道、評定所江相越、六藏義、備前守殿

二ノ廿八

高橋作左衛門没収本、悴小太郎江渡方相伺候処、

八ノ廿六

御差図ニ而、揚座敷江被遣、右之趣、渋川助左衛門方江罷越、

三ノ十六

難被及御沙汰段、被仰渡、

八ノ廿六

申達、今晚半右衛門宅番いたし候、

三ノ十六

御書物奉行老人、評定所江可罷出旨、御書付、新部屋ニ

十ノ三(五七丁裏)

六藏揚座鋪江被遣候御届、但馬守殿江上る、

三ノ十七

右ニ付、今夕、評定所江伊太夫、六藏宅江新衛門相越、

十ノ三(五七丁裏)

伺ニ不及旨申聞、

同日

六藏儀、稻葉富太郎江御預、

十ノ五

六藏御吟味中、家来腰鑑札引上候段、当番御目付江(五六丁裏)

三ノ廿六

右之趣、越中守殿御宅江罷出、御届書上る、

十ノ五

直達、

三ノ廿六

六藏跡役ハ不被仰付、減切之積可心得旨被仰渡、

十ノ八

泰平武鑑御買上之処、落丁有之、御側衆より察度

四ノ十五

御書物同心過人文字相除度旨之断状、御勘定所江達、

十ノ八

有之候段、御細工頭申聞、

四ノ十五

御納戸より老対物相渡間敷旨、主膳正殿被仰渡候段、

十ノ八

達書差越、

弘化三年(一八四六)

昨十六日、水野新衛門、金井伊太夫、類焼御届進達、

小林老若衛門

正ノ十六(五八丁裏)

右同断ニ付、小田雄之助、三十日類焼休申渡候御届上る、

同上

半右衛門、伊太夫類焼休、伺之通被仰渡、承付返上、

右、立退所之義、支配向并御書物師江も、申通、

右、休中詰番不罷出旨、両丸御目付江達、

此度大火ニ付、諸向拝借被仰付、御救金被下、

右、御礼、半右衛門、伊太夫、一両日之内、廻勤之積、

雄之助義ハ、月番新衛門宅江計、相越、

同人御救金被下候御礼として、新衛門、両丸御老若

不残廻勤、

同廿四(五八丁裏)

去月十五日学問所焼失之節、出雲寺万次郎下代貳人

駆附御用物取片付候ニ付、老貫文ツ、被下候旨届出、

徳川栄松録、広大和名勝志切解之義、伺上る、

右者切解ニ不及、其儘御庫江仕舞置候様、被仰渡、

御風入御用半紙増請取之儀、伺之通、被仰渡、

御備之函 老箱 主膳正殿御封印、

右、新規御預、且年々御用部屋ニ而、御風入有之旨出伺書

入候ハ、相伺可差出旨、被仰渡、

藩翰譜、本庄安芸守家譜御用ニ付取調候処、無之旨、

十一ノ十九

中神順次申聞候ニ付、右者、慶五年(慶長)より延宝八年(五九丁表)迄、万石以上拳候由、及答、

出雲寺万次郎手代老入、今度御買上御本之義

に付、越後国潟町迄差遣候段、主膳正殿江、立田録助

を以、申上、

右ニ付、道中奉行御勘定奉行江之達書、御勘定衆江も

右同断ニ付、宿触之義、万次郎願出、

桜田御本之内、宇多源氏、村上源氏之譜、但馬守殿

御用ニ付、差出、

寛政重修譜 拾貳箱

同 略図 老箱(五九丁裏)

但馬守殿、川上謙三郎を以、御下ケ、

精々大切取扱候得共、行届兼、重修譜之内、鼠喰出来、

略図者、時々、夫々之年ニ而見合、取扱候故、自然、汚レ出来、

右之趣、一応、但馬守殿江申上置候旨、断申聞、

御進献御書籍五部進達、

右ニ付、荷造之義、御賄頭、御細工頭江御断、

御本箱内詰、木綿綿、御納戸頭江御断、

外枠日覆等仕置候様、主膳正殿被仰渡、

御本丸炎上之節、焼失、并奥御用御出切之分御書籍

補写御買上之分出逢之間江持出し、若年寄衆御見(六〇丁表)

分、御老中方、奥より御引之節、主膳正殿御披露にて、

御一同御見分、伊勢守殿、本郷丹州江御談之上、

八ノ十二

九ノ十

同上

九ノ廿八

十ノ廿三

十一ノ廿

十一ノ廿一

十二ノ三

六ノ十六

上覽可被遊由ニ而、奥江相上る、

十二ノ十

右、補写之義骨折候ニ付、

上覽相濟、宜出来之段、御沙汰之旨被仰渡、御下ケ、

同十一

金貳両 市埜市郎左衛門

金壹枚

金井伊太夫

大柳甚之助

焼失御書籍補写御用骨折相勤ニ付、被下之、

黒野源太左衛門

同断、綴仕立等骨折に付、
弘化四年(六四)(六一丁裏)

銀五枚ツ、

水野新衛門

御用部屋御手許ニ可差置御書目録本編、并彙

小林半右衛門

刻之分認、可差出旨、主膳正殿被仰渡、

右同断手伝相勤候ニ付、(六〇丁裏)

金貳枚

黒野源太左衛門

二ノ八《201・41》

右於新部屋、主膳正殿被仰渡、

右、年来出精相勤候ニ付、被下之、

三ノ十七《201・86》

金貳両

大柳甚之助

御目付本多隼之助見廻り有之、御小人目付を以、相替

々五百疋

岩崎多左衛門

義無之哉之旨、申聞候ニ付、相替儀無之旨、雄之助(四)

々三百疋

市野(世)一郎左衛門

三ノ廿八《201・99》

々五百疋

持田鎌太郎

遠山(原元)左衛門尉役所ニおいて、御三家方江、様文字附

同断

長岡栄之助

候儀、出雲寺万次郎江、尋有之、右、始末申立之書面写

々三百疋

大柳進之助

五ノ二《201・140》(六一丁表)

右、御進献御用相勤候ニ付、被下之、

御進献御書籍仕立直之義

朝野旧聞哀藁

金七両

山本清右衛門

右、主膳正殿御用ニ付差出、筒井(成徳)紀伊守、林(成徳)式部、成嶋

々五両

小田雄之助(六一丁表)

桓(良徳)之助拜借ニ候間、向後、三人之内江引合、中之口

同三両

持田佐右衛門

おいて、直ニ請取渡、御用濟、返納之節、双方より御届

々

岩崎多左衛門

五ノ十二《201・151》

々

岩崎政之丞

差出候様、竹村長十郎申聞、御風入ニ付、樟腦、片腦、半紙、程村紙、増請取之儀、申上候

々

都甲斧太郎

書付江承付候様、案紙添、主膳正殿御渡、六ノ二《201・176》

々

鈴木文蔵

但、書面之品々、去卯年御改正之節、員数相改候、元断高江

差加へ、以来、断書差出、可請取旨、

御用部屋御扣之御書目出来、主膳正殿江出ス、八ノ廿三《202・76》(六二丁裏)

右、認候もの、且、綴方仕立いたし候ものへ、御褒美被下、

九ノ十《202・96》

道藏経御修復伺之、御入用を以可取計旨被仰渡、十一ノ廿三《202・179》

右懸り名前并御手当願書とも主膳正殿江上る、十二ノ二《202・188》

御三家方家老系図、其外出板再刻之義、願之通

出雲寺万次郎江申渡、十二ノ十《202・196》

嘉永元申年

黒野源太左衛門病氣に付、詰番御断書、御用番江上る、

正ノ九

金井伊太夫妻昨夕病死ニ付、御届書進達可致処、

御退散故、主膳正殿江、新右衛門持参、正ノ十七《(六三丁表)

黒野源太左衛門御役 御免願書、但馬守殿对客江、

伊太夫罷出、御直ニ進達、御扣ハ用人を以出ス、二ノ廿五

但、御褒美願とも、是又、用方を以出ず、

金貳枚 黒野源太左衛門

願之通、御役 御免、且、年寄迄出精相勤候ニ付、被下以名代

伊太夫江、被仰渡、三ノ二

源太左衛門跡役ハ不被 仰付、三人之定人数相心得可申、

尤、此後、自然、御書物奉行被 仰付候儀も候ハ、過人者

心得可申旨、但馬守殿、於新部屋、被仰渡、三ノ七

中島祖兵衛事不宜風聞有之、源右衛門宅おゐて、(佐山正武) (六三丁裏)

慎申渡、名代小田屋之助、立会市郎左衛門 四ノ十二

道藏経御修復所之義、小普請方江申談、御三家方

御扣所借受候、五ノ二

右、御届書進達、

右、入口錠前、此方にて取計候段、御宝藏番之頭江、

懸合濟、五〇〇

御文庫御本、諸家江拜借被 仰付候先例書取調、

差出候様、原弥十郎談有之、(原孝) 五ノ十五

翌日、差出之、

出雲寺万次郎、御風入中、御庫江出度旨願出る、(六四丁表)

先格有之候得共、中絶之事故、当年之処者、先ツ 五ノ廿五

沙汰ニ不被及旨、申渡、

石川良左衛門病氣ニ付、詰番御断書、御用番江進達、(通註) 六ノ十七《(六四丁裏)

明廿七日、山王祭礼ニ付、殿中染帷子麻上下着用可

致旨、御書付出る、七ノ廿六

享保、寛政度、小金御鹿狩御用懸御役人附出来

之有無、御目付より問合、八ノ廿一

右、取調候処、先例無之、其段、及答候、八ノ廿九

出雲寺万次郎申立候御鹿狩ニ付、御役人附之儀、難被

及御沙汰旨、被仰渡、九ノ十五

御庫御修復ニ付、御三家方御休息所江、御書籍仮

片付之義、伺之通、被仰渡、

九ノ廿七

御番所後、岩岐高く、黒鍬ニ而者、怪我之程難計、

右之趣、小普請奉行江達、」(六五丁表)

人足差出方、御作事方江申談候処、御勘定所附

右之趣、寺社奉行江も懸合、小普請方江相任セ候、

御目付方承引候ハ、可差出旨申聞候ニ付、御勘定

三番御庫家根、是迄本瓦葺之処、棧瓦葺ニ

組頭江申談、其通いたし候、

八ノ廿一

模様替伺済之旨、小普請方より達有之、

十ノ九

右之節、麻繩三拾疋棒懸り御右筆より請取、右者、

石川良左衛門詰番御断六ヶ月ニ相成候得共、出勤いたし

請取切にて返却不致積、談判いたし候、

八ノ廿八

兼候ニ付、今二三ヶ月保養為仕度旨、同役連名願

十一ノ廿

出雲寺願出候日光

御用番江上る、

御法事御用懸り御役人付出板之義、伺候処、不被

十二ノ十五」(六六丁裏)

右、願書江、御書取添、今二三ヶ月保養不苦旨、被仰渡、

十一ノ廿八

及御沙汰旨、被仰渡、

御目付より差越、

春秋左伝 宋板

十二冊

右跡御礼、御用番御老中方、御支配方ハ不残、名代金井

三国志 々

十七

伊太夫、服紗麻ニ而廻勤、」(六五丁裏)

東都事略 々

十四

嘉永二酉年

玉堂類稿 々

七

来十八日小金御鹿狩ニ付、定附黒鍬之内、貳人引

玉荊公文集 々

十四

揚之旨、御目付より達来る、

三ノ九

右五部、御小性頭取より御文庫江御預之段、奥儒者

佐山源右衛門悴辰吉、御証文願、大番頭より、源右衛門

依田源太左衛門申聞、受取之、いづれ貴重之御品

肩書ニ、過人之文字無之候処、書替所より、過人之旨

候得共、先ツ三番江納置候、」(六七丁表)

加筆有之候ニ付、表御右筆より問合候間、過人之旨申

(白紙)」(六七丁裏)

〇

およひ候、

三ノ十四

嘉永三戌年

〇

今曉九時、御供持ニ而、小金野江被為

成候、

水野新衛門家来紛失物一件ニ付、昨日町奉行所江

殿中ハ遠 御成之通ニ相替候儀無之、

三ノ十八

呼出有之、右御届書、采多番様越中守殿江上る、

御鹿狩跡御場所拜見願之通、被仰渡、

三ノ廿三」(六六丁表)

右、一件落着ニ付、御届書進達、

三ノ七

御書物奉行

林奉行被仰付、

石川良左衛門

右、不快ニ付、同役より、大目付、御目付江、引合居附にて

相濟、 四ノ八《203・106》

同心共悴、無足見習ハ、貳拾ヶ年以上勤之もの、外、

不相成旨、書面を以、世話役江申渡、四ノ十四《203・116》(六八丁表)

宋板御書籍、御修復之者江、壹ヶ月金貳分ツ、被下之、

七ノ十三^(十一)《204・23》

御材木手代中村又三郎宅之義、親類共心附候様、

被仰渡、府馬清兵衛弟之儀ニ付、心附之義、申渡候様、

御材木奉行より達有之、 七ノ廿一《204・33》

嘉永四亥年

大学衍義、^{御謄本}

右、御用濟御下ケ内、初巻焼失ニ付、書写被仰付候旨、

奥儒者断、右之趣、但馬守殿江申上置、 八ノ二《205・48》

木村董平^(定)誓詞之処、不快ニ付、今晚御用番江、使者^(定)(六八丁裏)

を以、御断差出、 八ノ十一《205・58》

追而相達候迄、夏服相用候様、御書付出る、 八ノ廿九《205・80》

同心組頭上下着用之起本、奥御右筆より問合有之、

伺書之留ハ無之段、及答、 九ノ三《205・84》

追々冷氣相成候ニ付、今日より時服着用可致旨、被仰渡、

九ノ七《205・89》

老四御庫唱替之義、伺之通、被仰渡、 九ノ十《205・92》

市野市郎左衛門、大柳甚之助勤候内、

御扶持方五拾俵、元之高ニ御足高被下、

九ノ十六《205・99》

大御番同心小田鍼三郎、御書物同心被仰渡候処、病

氣ニ付、追而可引渡旨、右頭より文通、十ノ四《205・121》(六九丁表)

右之趣、御届上る、

小田鍼三郎病氣ニ付、名代として大村孝之助儀、

逸見^(甲斐守長造)甲府より引渡有之、

甲府勝手被仰付候、元小普請水野式部^(忠勝)組中島与十郎

十ノ十六《205・134》

養子秀次義、病氣ニ付療養中、御書物同心鈴木

文藏^(白藤)方江残置候旨、式部より申越、

十一ノ十四^(十一)《205・166》

御庫移替御賄代銀被下方願、難被及御沙汰旨、

被仰渡、 十二ノ廿四《205・212》

頃日、盜賊立入候ニ付、打捨不苦旨、御書付出る、 四ノ九

多喜楽^(多紀元龜)真院、同安良、御文庫罷越、御書籍拜見願^(多紀元龜)(六九丁裏)

之通、被 仰付旨、御書取、主膳正殿御渡、 五ノ朔

但、罷越候都度々々御届不申上積、申上置、

道藏^(多紀元龜)御修復懸白衣勤、難被及御沙汰旨、被仰渡、 五ノ廿五

嘉永五子年^(一八五二)

殿中講釈之節、詰合之面々出席不苦旨、御目付より

答書面差越、 正ノ九《206・10》

蔦田又三郎病氣ニ付、詰番御断届書進達、 正ノ廿一《206・18》

御風入ニ付、諸向請取物御断進達、 四ノ廿二《206・144》

但御納戸江御断、是迄諸色減方員数、左書ニ(七〇丁表)

向後四季御蔵掃除いたし候様申渡、

五ノ朔《207・115》

有之候処、当年より除之、

《206・144》

佃沖并徳丸原ニおゐて昼夜合図打揚稽古

六ノ廿九

之儀、当年ハ相止候様、御書付出る、

《207・176》

御届書之扣入用ニ付、差出候様、片山与八郎申聞、

西丸御普請上納金 御免ニ付、御用番、并御勝手懸、

則写相達、

六ノ五《206・193》

七ノ十六(七一丁裏)

会所障子張替小普請方江達、

十ノ十三

御代々様 御位記宣旨写、

(立命館大學文學部教授)

大猷院様 御位記之写、御用ニ付、差出候様、奥御右

(立命館大學文學部特別任用教授)

筆申聞候処、

(立命館大學文學部教授)

権現様之外、御代々様 御位記 宣旨之写

無之、其段、及挨拶、

十一ノ十二(七〇丁裏)

御文庫ニ有之候

震筆、并 御筆之分、目錄書拔、原弥十郎江、差出、

十二ノ三

嘉永六丑年

佐山源右衛門儀、明廿九日、

御城可罷出旨、御書付到来之処、忘中ニ付、御請

名代として、木村董平、但馬守殿罷出、心得方

相同候処、明日、当人罷出候儀者勿論、名代差出

にも不及旨、御差図有之、

三ノ廿八《207・86》

右御差図之旨御目付江申達、

三ノ廿九《207・87》(七一丁表)

源右衛門儀忘中ニ者候得共、明晦日、

御城江可罷出旨、被仰渡、

三ノ廿《207・87》